

治療的コミュニケーションとしてのナラティブ

廣瀬 幸市

教育臨床学講座

Narrative Approach as a Therapeutic Communication

Koichi HIROSE

*Department of Clinical Psychological and Practical Studies in School Education,
Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan*

要 約

近年、心理臨床実践の領域で注目されているナラティブは、哲学や社会学の分野でコミュニケーションの問題と関連して取り組まれている。本論では、ナラティブの「発話主体の意味行為として、行為の遂行としてのナラティブ」としての側面から、言語と意味作用が通常の仕方では成立しなくなる言語の臨界状況を踏まえた上でのコミュニケーションを考える為、治療的なコミュニケーションを含めて、この問題を多方面から考察した。

発達の視点からは、物語られた自己としてナラティブが紡ぎ出される原初には重要な他者との共創造が見出された。また、社会学の視点からは、社会学的自己論の「自己とは他者との関係である」と「自己とは自分自身との関係である」という主要な暗黙の前提が「自己を変える」という課題に直面した際に難題に突き当たる様を確認した。そして、ナラティブ・アプローチ（物語療法）の立場からは、クライエントの語る自己物語の中に完全には一貫していない点、整合的には閉じられていない点を見出すことで、彼らの語る物語を内側から宙づりにして、「自己を変える」ための作業的足場になっていることが解説された。これらを踏まえて、治療的コミュニケーションを精神分析とりわけラカン派のアプローチから捉えてみると、ナラティブ行為には自分の統御が及ばない他者性が常に既に存在しており、カウンセリング的対話においてクライエントが生成するナラティブは、クライエント本人の意識では捉えることの困難な無意識の主体が生成するものであって、そのような無意識の流れを通して紡ぎ出されるナラティブがクライエントのそれまでの自我のあり方を変えていくのだ、ということが理解された。

Keywords：ナラティブ、自己物語、無意識の主体

0. はじめに

1980年代から解禁されたインターネットは、瞬く間に全世界に普及し、この数年では携帯電話に搭載されることで更にその利用頻度を上げている。携帯電話に関しても、この十年で利用度合いは蔓延化して、その使用形態が我々の精神構造に与える変容が心理療法家から指摘されている（大山、2004）。電子メディアの急速な普及以前から、社会学者によって共同体や家族の解体が指摘されており、それらの内部に暗黙のうちに包摂されていたコミュニケーションが今日では人々の間でその自明性を失い出しているようである。櫻村（1998）は、電子メディアを始めとする現代テクノロ

ジーがもたらした人工的システムによって、これまで具体的他者が担ってきた機能の幾つかを人々が必要としなくなることで、人と他者との具体的関わりがどのような可能性として残されるのか、あるいは、そもそも他者との具体的関わりが主体にとって如何なる作用を持っているのか、ということが問われ出した、と指摘している。

コミュニケーションの問題は社会学の根幹をなす領野であり、そこにおいては哲学分野で起きた「言語論的転回」という現代思潮が押し寄せて、さらに「コミュニケーション論的転回」へとシフトしている。表象を人々が共同構築する現場に注目が向けられることで、コミュニケーション論は言語と主体を分析する鍵と見

られるようになったものの、「言語を還元不能な所与のものとし、言語・意味作用・コミュニケーションそれ自体の存在条件（つまりそれらの彼岸）を問わない構築主義的枠組みをとっているため、その分析能力には一定の限界がある」（檜村、1998）。このような問題意識の下、彼女は語用論と分析哲学、社会学におけるコミュニケーション論を検討した上で、ラカン派の精神分析的知見によるコミュニケーションの構造モデルを提起している。

本論は社会学の問題領域を広く渉猟するのが目的ではないが、言語と意味作用が通常の仕方では成立しなくなる言語の臨界状況を踏まえた上でのコミュニケーションの問題を考察する為、彼女の提起するコミュニケーション／意味作用モデルを参照していきたい。本論ではとりわけ、ナラティヴに着目しており、「個人の生の意味が構築されたものとしてのナラティヴ」ではなく、「発話主体の意味行為として、行為の遂行としてのナラティヴ」（森岡、2011）としての側面から治療的なコミュニケーションとは如何なるものであるか、について考察していきたい。

1. 発達の視点からみたナラティヴ

ナラティヴを発達の観点から展望しようと思うと、必然的に子どもが幼児期に言語を使用し出したところまで遡らねばならない。1歳半の飛躍を超えて乳児期から幼児期へと移行した早期の頃に、その源流を見ようとする知見は発達心理学において相違は殆どないが、言語使用のための前提をどこまで含めるかという考え方については、学者により見解が分かれるようである。それらは、延滞模倣に見られる表象能力と象徴機能が言葉の獲得の認知的前提であったり、喃語の練習時期を経て親の母国語を習得することが初語を含む発語の音声的前提である。また、共同注視のように親との関わりにモノとの関わりが統合された三項関係の成立により、言葉の意図の道具性と協約性との理解の前提が獲得される。更には、親の話しかける声の調子やリズム、切れ目に合わせて乳児が手足を動かす反応に見られるような、親と乳児との同期的反応としての原会話が既に非言語的コミュニケーションの原型になっている。この関わりは更に、乳児に向かって舌を出したりする大人の行為を乳児が同じ動作で示す新生児模倣を最早期の対人相互作用と見る考え方まで行き着く。このように、言語的交流の源流をどこまで遡上するかには見解により幅が見られる。しかし本論においては、コミュニケーションのうち治療的な意味に関係する側面に局限して、以下に論じていきたい。

言語使用の前提をどこに置くかにより、幼児が言葉を習得する関与の度合いは大小するが、親の幼児への関わりを抜きにして言語獲得が考えられないことは、

今日明らかになっている。言葉の正しい発音も親への模倣が幼児の側で一方的に行われるのではなく、幼児の模倣の意図を感じた親は模倣し易いようにゆっくりハッキリと発音して、幼児の模倣を促進している。乳児の頃から、親は自分と近い音声を上手く発音できると嬉しそうな表情を示しながら褒めて、さらなる模倣の反応を促してきたのである。このような親からの働きかけもあって、生後2ヵ月から始まる非叫喚の反復喃語は当初「地球上の言語にみられるあらゆる音韻タイプの発音が出現」していたにも拘らず、9ヵ月以降は「しだいに母国語の音韻に限定されてくる」のである（岩田、1998）。そして、「模倣促進的な循環過程」において、「音声の相互的な模倣（mutual imitation）は、音声という〈モノ〉を介した母子間での三項的なやりとりともいえる」のだが、このようなやりとりの中で、親の声の指し示すモノを目でなぞりながら、声で発音をなぞりながら、その意味を把握するようになるのである。岩田（1998）は、「意味と音声の二つの三項的な共有関係が一つに重ね合わされる（統合される）とき、音声がその場の対象を表すものとして結ばれ、記号化されてくる」と言い、「三項関係のなかで話者の音声は何かを指示するための記号であることに気づいてくる」過程を通して、協約的な音声を紹介して目の前にモノがなくとも、今ここにはないものを要求する「代表機能としての音声」を使えるようになる、と説明している。

この頃、延滞模倣ができて「再現表象の能力」（野村、1996）を持つようになっていく乳児は、交替遊び（jeux d'alternance）を通して「自他が別個の行為主体であると同時に、自他間の同型性に気づき」、「一つの場面のなかで、能動相と受動相を交互に体験することによって、交替的な行為主体としての自己と他者が分化してくる」（岩田、1998）。このことは「一つの場面において自他性が相補的な対の関係へと分化してきたことを示唆する」とし、「相補的な関係性のなかで行為主体としての自己感覚がより明確になってくることを示している」と彼は指摘している。

1歳半ば頃に自己性の認識が成立し始めると、乳児は自他の心的な差異に気づくようになる。それは彼らが自分の名前を理解したり自己命名したりする場面等で観察される。そして、自分を表す名前が自己を代表象することが分かってくるに止まらず、周囲の大人の言葉の使用を介して、自己の内的状態（生理や情動、知覚や感覚、心情）を表現する言葉を獲得するようになる。岩田（1998）によれば、2歳に近くなると、それに平行して他者の内的状態への言及も見られるようになるという。このように、自己の内的状態や行為を叙述できるほど自己への認識が深まってくると、自己が時間的にも空間的にも連続しているという意識や、連続的な自己のアイデンティティの感覚が生まれてくる。

これをStern, D. (1985/1989)は「言語自己感 (sense of a verbal self)」と命名している。このころ盛んに見られるようになる一人二役のごっこ遊びは、それまでの行動水準での交替遊びが心的表象の水準で再構成されたものである。かつて自分に向けられた他者の声を取り込まれて、その他者の観点から自分を眺めて自分の行為を決定しようとすることであり、「〈内なる他者〉との自己内対話の原初的な芽生え」(岩田、1998)と言える。

そして2歳頃になると、象徴的次元において自他を互換的に交替しながら遊ぶようになってくるが、自己を他者に見立て、他者を自己に見立てて遊ぶことで、「自己が他者と同質的で、投影的に置き換えられる状態」から「自己が他者とは交換不能な独自の人格主体として把握されてくる」(岩田、1998)段階へと発達的な変化が生じてくる。これは、いわゆる「自我の芽生え」であるが、「自分の絶対的な視点を立て、恒常的に存在する特定の自分という視野の下に、他者を自分との関係で位置づける」(浜田、1994)ことを意味している。この「中心としての〈わたし〉の成立」(岩田、1998)は、自分を主張するための表現として「ワタシ」や「ボク」という一人称が使われるようになってくることにも見て取れる。視点により替わる自他関係の相対性を理解できることを通して、同質的で互換的な多様な他者に対して特権的な〈わたし〉を主張することが可能になってくる。このように、行動の主体としての自己が形成されてくると、外界の事象を自分なりに意味づけ秩序づけていこうとする認識能力が発達していく。幼児の関心は外界へ向けられるばかりではなく、内界へも向いていくのだが、内的状態(生理、知覚、感覚、情動)を表現する語彙は2歳から3歳にかけて急激に増加することが知られている。自らの内的状態を内省できるようになるのは、自己の中に「内なる目 (inner eye)」が成立してきたことを意味するが、幼児が自分の内的状態の自覚と平行して他者の内的状態をも理解しようとし始めていることが分かるのである。

これらのことは自我の芽生えと関連していて、「他者にはみえない、自分が考え、信じ、期待するといったわたし独自の心的世界を持つ」ことで、「他者に秘密である自己の発見」であると同時に、「他者も、自分とは異なって考えたり、信じたり、期待したりする独自の内界をもちうる存在であることに気づく」ようになっていく現象であると、岩田 (1998) は示唆しており、この〈わたし〉と〈あなた〉の異質性の理解が言語発達にとって重要な意味を担っている、と指摘して、言葉が独自の内界を形成するのに関与している一方で、他者との共同性を確かめ回復しようとする手立てとして内界を他者に物語る (伝え合う) ために言葉が必要になってくる、としている。これを換言して、「〈わたし〉の誕生とは他者へ物語る必要のある自己の

世界が誕生してくること」と表現して、このような自他の認識が「言語発達においても2歳過ぎから3歳にかけて加速度的な言語発達をもたらす契機」となっていると指摘している。

ところで、ナラティヴは大別して、自分自身や出来事について物語ることであり、語られた物語を指すという2つの側面がある。前者が森岡 (2011) の言う「発話主体の意味行為として、行為の遂行としてのナラティヴ」に相当し、後者が「個人の生の意味が構築されたものとしてのナラティヴ」に相当すると考えられる。今は簡略して、前者の行為としてのナラティヴを「物語ること」とし、後者の他者に語られて聞き取られた物語を「語られた物語」と表記する。そうすると、発達心理学においては従来、前者の「物語ること」というのは、年齢に伴って文法構造等が発達して複雑化して統合度が増大していくという側面に着目されて研究されてきた。あるいは、単一エピソードの陳述から一般的・普遍的な抽象の意味へ把握が進行していくという、語りの形式的側面から解明がなされてきた (内田、1990)。ナラティヴを可能にする知能・思考能力の発達の観点からすると、幼児は言葉を使用できるようになる時期に速やかに「物語ること」ができるようになる訳ではない。初めの頃は相当程度聞き役の促しや導きがなければ可能とはならない。3歳頃の幼児は「自己の物語を他者へ一方的、特権的に語る」(岩田、1998) 特徴があり、他者からの話をしっかり受け取ることが難しい。しかし、母親が幼児の十分でない言語表現からその発話意図を汲み取りながら受け止めて、幼児に分かるような言葉で返すというようなリードを取れば、かなり長い会話が可能になってくる。

これまで見てきたように、幼児は言葉を使用することによって、他者から見られる自己、対象としての自己、客体的な自己、反省的な自己というような再帰用法で表現される「言語自己感」を持つようになる。この段階の幼児にとって、「物語ること」は自己を「語られた物語」として把握して他者に表明することであり、また他者からそういう自己として理解されることを意味している (石谷、2007)。ここで、幼児が語る物語は、当初は対話者の促しや導きなどの助けを相当に借りて再構成された自分の経験や出来事である。十分な表現能力を持っていない幼児は、自分の直接の経験を余すところなく伝えることは到底できず、専ら親や養育者のナラティヴを借り入れるしかない。「物語ること」は、経験に意味を与え解釈する行為である。しかし、この行為は幼児が親や養育者からその評価基準や解釈を採り入れることから始まるものであった。それゆえ、「物語ること」は幼児と親・養育者との共創造である、と言われるのである。このように共創造された物語であっても、幼児が語った物語は他者に公言した「公的な歴史 (official history)」(Stern、2000) となっ

ていく。他者に向けて「語られた物語」は、他者にそういう自己として理解されることと同時に、自らをそういう自己として解釈することにもなる。つまり、「物語られた自己 (narrative self)」（Stern, 2000）は公的な自己となって対人関係の通貨（currency）として流通するようになるのである。

ここまで、ナラティブに関わるコミュニケーションの原初を少し丁寧に見てきたが、幼児期までに形成されてきた自己が原型になって、それ以降、とくに青年期から本格化する自己形成が自己物語を核に進行していくのである。それをごく簡単に素描すれば、次のようになろう。人は自分自身について物語る中で、様々な体験や行為を選び出し、特定の視点から光を照射し、時間の流れに沿って組み上げ紡ぎ出していく。過去の自分は、様々なエピソードを経て現在の自分にまで到達し、二つの自分は自己物語の結末において重なり合う。この一致は、他者によって聞き届けられ受け入れられた時に、その人を形成する現実となる。このように、自己物語は自己を構成するのである。

それでは以下、社会学その他の視点から、ナラティブが自己形成ひいては自己変容にどのように寄与するのかを見ていこう。

2. 社会学の視点から見た自己

社会学は自己に関して多くの研究を積み重ねてきている。これら自己論に関して全てを展望することはできないが、本論に関係する領域に関して、以下に取り上げていく。これから取り扱おうとする自己論は、大まかに言えば、二つの認識を共通の前提としている。それらは浅野（2001）の表現を借りれば、「自己とは他者との関係である」というものと、「自己とは自分自身との関係である」というものである。これら二つの認識はいずれも Mead, G. H. によって明確に示された。

まず初めに、「自己とは他者との関係である」という前提について、概観しておきたい。この前提は換言すれば、「自己の個性性に対して社会関係の方が本源である」という認識である。Mead (1934/1973) の主張は、自己意識を持つ個人の存在より社会関係やコミュニケーションの方が時間的・論理的に先にあり、自己意識を持つ個人は社会過程を経て社会過程の中で初めて生まれてくる、というものである。このことは、次のように考えると納得できる。つまり、自己意識を持つことができるためには、自分自身を外側から眺める視点を取ることができなくてはならないのだが、そのような視点は生得的に与えられているのではなく、原初的には自分に向けられてた他者のまなざしとして体験される。その後、徐々に自己に取り込まれていき、やがて内在化していく。このように他者の視点を通して間接的に得られる他ないということは、元々それは

他者とのコミュニケーションの中で経験したものであるということの意味している。社会的経験や活動、他者との関係形成の方が自己の成り立ちより原初であるので、「自己はそれ自体で完結した実体である」という社会通念の見方は「自己は最終的には社会関係やコミュニケーションに還元できる」という見方へ転覆させられるのである。このような考え方はその後の社会学的自己論に広く受け入れられ、Goffman, E. が人々の相互作用過程を演劇的な観点から捉えた議論につながっている。

次に、「自己とは自分自身との関係である」という前提について見ていこう。これは、自己とは他者との関係と同等に自分自身との関係でもある、という認識である。Mead (1934/1973) によれば、自己は自分自身を対象にして働きかけていくという点が重要な特徴であり、この点によって「自我をその他の対象や身体から区別できる」としている。この考え方は、心理学の分野にも広く知られている、自己を「主我 (I)」と「客我 (me)」の2側面に分けて自己を考えた議論につながっている。改めて素描すれば、「客我」は自分に対する周囲の人々からの反応や態度から自己を知り、その見方を自身の内側に一つの視点として取り込んだものである。それは、内側から自分の行為を見つめ、評価するものであって、「内なる他者」とも言える。これに対する「主我」は、客我を前提として、時にはそれに対抗して反応する、行為の担い手である。主我の行為は客我の視点に対してなされるものであり、客我には主我の行為に対する他者の反応が織り込まれている。このように、自己の二つの側面は主我と客我との間の相互作用あるいは対話として成り立っている、と理解することができる。それゆえ、「自分自身への関係」というのはこのような相互作用や対話を指すものであることが分かる。

ここまで、社会学的自己論における主要な二つの暗黙的前提となっている認識について見てきたが、これらの認識によって捉えられる自己は、浅野（2001）によれば、「自己を変える」という課題を前にした時に難題に突き当たるのだという。そこで、この問題についてナラティブ・アプローチの視点から概観しておきたい。

まず初めに、自己を変えるあるいは変わることの難しさから見えてくる、二つの認識にとっての困難を概観しておきたい。これらの困難を先に見た二つの認識に対応する順序で確認していこう。

一つ目は「自己とは他者との関係である」という認識に対するもので、「対他関係を変えることの困難」と表現できる（浅野, 2001）。第一の認識から出発して推論していくと、対他関係を変えることによって自己を変えることができることになる。これについては、大学まで含む教育現場の心理臨床実践でよくテーマになる

ことであるが、我々心理療法家の前に現れるクライエントは、それまでの生育歴の中で何度か自分を変えよう、あるいは変わろうと試みたことがある人が多い。学年進級のクラス替えで、あるいは進学による学校変更の機会に、人間関係を大きく変えることのできる機会を活用して、自分なりに新しく関係を作っていこうと試みている。しかし、彼らは実行当初の期待も薄れていき、やがて失望に変わっていくことを繰り返すのである。これは、具体的な人間関係が変わっても、その人の対人関係パターンが変わらない故に生じている問題である、と指摘されている。ところが、この対人関係パターンの問題は当のクライエントには、正に自分の問題、自分の責任と感じられるのである。自己を変えるためには関係を変えなければならないので、そのための努力の一環で関係を変えようと試みるが、その結果として、関係を変えるためには自己を変えなければならないことが分かる、という奇妙な循環に陥ってしまうのである。これが第一の認識に対しての困難である。

次に、第二の「自己とは自分自身との関係である」という認識に対するものは、「対自関係を変えることの困難」と表現できる（浅野、2001）。この困難はサイコセラピーにおいてクライエントが自己変容を起こしていく際の困難の正に中心的課題である。これは、端的に言ってしまうと、変えようとしている自分を変えられるべき自分を前提にしているという循環である。社会学の用語で説明すれば、「主我—客我」という「自分自身との関係（対自関係）」が自己なのであるが、自己を変えようと考えている自分は「主我」であるのに対し、変えられるべき自分は「自分自身との関係（対自関係）」なのである。このことは少し考えれば分かるように、自身が立っている足場がないまま働きかけを続けることを意味している。浅野（2001）が用いている比喩を引用すれば、自分で自分の襟首を掴んで沼の外に放り出したミュンヒハウゼン男爵と同じことを求められていることになる。ミュンヒハウゼンのトリレンマと呼ばれる循環論法からも分かるように、自分が立っている足下を掘り崩すことができないように、主我が自らの力で対自関係を変えることはできないのである。

以上、簡単に二つの認識の困難さを概観したが、次にナラティヴ・アプローチの視点からこれらの問題に対してなされる対処を見ていきたい。

3. 物語療法の視点から見た自己

本章で取り上げる物語療法（ナラティヴ・アプローチ）は、森岡（2008）が取るようなナラティヴを臨床場面で用いるアプローチを広く含んでナラティヴ・アプローチとしている定義ではなく、家族療法の源流から

1980年代に生じてきた物語療法と呼ばれる一つの潮流を指している。この一つの潮流もいくつかの支流が合わさって大きなうねりとなっているのだが、その代表的グループはAnderson, H.のグループとEpston, D.およびWhite, M.のグループであると目される。物語をどのような視点から捉えるかについて、このグループ間で考え方に差異があるのだが、本論ではそれには触れず、共通の見解についてだけ概観しておく。彼ら物語療法の前提は、浅野（2001）によれば、大きく見て次の3点に集約される。第一に、人が生きていくためには必ず自らの経験を何らかの形で物語化しない訳にはいかないということ、第二に、物語することは生きられた経験のうち特定の側面を選び出すことでもあるから、必ず語り尽くせない残余の経験が残ってしまうということ、第三に、この残余の経験はクライエントの物語の外部に止まるものではなく、時に物語の中に一種の亀裂（「ユニークな結果」）として姿を現すということ、である。そして、彼ら物語療法のアプローチでは、クライエントとセラピストの関係（会話）を用いて、クライエントの自己物語を書き換えていこうとするのである。

それでは、以上の概観を踏まえて、先に見ておいた二つの認識の困難さにどのように物語療法が対処しているのか、確認していききたい。先ほどと同じように二つの困難に対応する順序で見ていく。

初めは「対他関係を変えることの困難」に対するもので、これは「関係を変えても自己は変わらない」という問題であると表現できる（浅野、2001）。これに対して、物語療法のセラピストはクライエントの家族（人間）関係や家族内コミュニケーションに直接介入しようとはせず、専らクライエントの語りに耳を傾け、その中にクライエントの語る自己物語の変化の兆しを探し求め、「ユニークな結果」と呼ばれる一つの例外に物語が変化していく兆しを見て取り、クライエントの自己物語の書き換えを進めていく。この自己物語の書き換えにより、「自己の変化／関係の変化」にアプローチしていくのである。

次は「対自関係を変えることの困難」に対するもので、これは「主我は自己を変える足場をもたない」という問題であると表現できる（浅野、2001）。これに対しては、先のようにセラピストがクライエントの自己物語を聴く中で、その物語の中に例外を見出すことで、クライエントの自己物語が必ずしも一貫していないこと、完全には閉じてしまっている訳ではないことを発見したことが、クライエントが自分を変えていくための足場を提供するのである。つまり、クライエントの語る自己物語を聞き届け受け入れながらも、同時にその中に例外・非一貫性・開放性を見出す他者（セラピスト）の視点がクライエントにとって自己物語を書き換えるための足場になっている、ということである。

以上のような物語療法の問題解決を参照しながら、浅野（2001）は社会学的自己論を以下のように修正している。これらを確認して精神的な観点による治療的コミュニケーションを考えていく基盤としたい。

まず、第一の「自己とは他者との関係である」という認識に対しては、「対他関係は物語を通して自己を生み出す」と表現される。第一の認識からは、先に確認したように、自己を変えるためには関係を変えなければならないのだが、関係を変えようとするとき自己がまず変わらねばならない、という循環が見出されてきた。これに対して、自己と関係の循環をうまく変容の方向に導いていくための支点として自己物語を考える、という修正がなされている。彼によれば、社会学的自己論においても本当は関係と自己との循環は起こっているのだが、理論が十分な説得力を持つため、あたかも関係から自己への直線的な説明が成立しているかのように見えるのだという。このように理論が循環を見えなくしているのと同様に、人々が自分自身について語る自己物語も自己と関係との循環を見えないものになっている、と指摘している。ある自己物語が現実的であると語り手に感じられている限り、自己と関係の循環は見えないままであり続けるのだが、このような自己物語を語り続けることで過去の私と現在の私とがつなぎ合わされて一つの視点として一致し、その一致を他者に聞き届けられ受け入れられることによって現実の自己となり、自己が構成されることになる。このため、人々は自ら語る自己物語の中に一貫性がない所を丁寧に排除し、物語自体が整合的に閉じられたものとなるように語ろうと苦心するのである。

次に、第二の「自己とは自分自身との関係である」という認識に対しては、「対自関係はパラドクスであり、自己物語はそれを前提にすると同時に隠蔽する」と表現される。この書き換えの要点は二つあり、一つは対自関係がパラドクスであることであり、もう一つは自己物語がそれを前提にしていると同時に隠蔽しているということである。一つ目のポイントは、対自関係という再帰性（リフレクション）は形式的には「自己言及のパラドクス」と同じ問題である。この点は、近代的自我を前提にして心理療法を行っているセラピストにとっては馴染みの問題である。フロイトから始まった近代的サイコセラピーは立場によりアプローチの仕方は異なるが、この問題を暗黙の前提にしている。二つ目のポイントは、自己物語は元々自己が自己自身について語るものであることから、「語る自己」と「物語られる自己」とは同一の自己に属している。このことがそのまま自己言及となっており、それ故この物語の信頼性（真偽の判断）は語り手自身ではなく、いわば宙づりにされている。そこで、人々が信頼に足る自己物語を語ろうとするならば、このパラドクスを何ら

かの形で隠しおさなければならない、ということになる。結論から言えば、この隠蔽は他者がその物語を受け入れてくれた時に成し遂げられる。その為の様々な工夫が先に述べたような、自己物語を語る際の苦心である。

4. ナラティブの視点から見た自己物語

ここまで社会学的自己論および物語療法の視点から自己の構成を見てきた。そこで、視点を自己物語に移して改めて「物語ること（ナラティブ）」ということが行っていることを別の角度から照射してみたい。それは、これまで上で見てきたように、人々がいかに苦心して語ろうと工夫を凝らしても、どの自己物語にも必ずその中に「語りえないもの」を含んでいる、ということに注目していくことである。

構成主義の立場を取る物語療法の人々はクライアントの語る自己物語の中に「ユニークな結果」を探すが、この「ユニークな結果」というのは、彼らがそこで語る自己物語からは排除されたもの、あるいは周辺化されたものであり、物語られ損ねたもの、構成され損ねたものという意味で、物語や構成の「つまづき」と考えられるものである。浅野（2001）はこれを「語りえないもの」と呼んでいるが、自己物語の中であって語りられ損ね、筋立てに登録され損ね、あげく物語をつまづかせてしまうような「穴」のようなものと指摘している。この「語りえないもの」は、自己という構造・一貫性・意味に亀裂を入れる危険な要素であり、自己を維持するべく自己物語を首尾よく語り続けるためには、この要素を何とかして見えなくする工夫が必要となってくる。このことは、自己言及のパラドクスを隠蔽する必要性として、先に見ておいた。自己物語の信頼性（真偽の判断）は語り手自身の内ではなく、物語全体の確かさは絶えず宙づりにされてしまうことを先に確認しておいたが、どのような自己物語も物語全体の確かさを宙づりにしてその本当らしさに疑問符をつけてしまうような「穴」を、それ自体の中に含み持っているのである。したがって、人は「たしかな」物語、「完全な」物語、「決定版」の物語を語ることはできないし、自己物語を語り終えてしまうこともできないのだと、浅野（2001）は指摘している。

それでは、先に見た「自己物語はそれを前提にすると同時に隠蔽する」を踏まえて、自己物語がいかにして「語りえないもの」を隠蔽するのか、その仕組みを浅野（2001）の論から見ていこう。彼は物語が元来どのような特徴を備えているか確認してから述べているのだが、本論では結論から先に述べることにする。まず、自己物語が自己言及の問題を物語の構造内に吸収し再定式化する。その上で、他者がその自己物語を聞き届ける相手となって、その物語を承認したり否定し

たりあるいは修正したりする編集作業に関与する。そして、その編集作業を通して元々のテキストに他者が関与していたことを忘却する。このようにして、「語りえないもの」は他者の助けを借りて自己物語の中に吸収され、暫定的に回避されるのである。この結論を、以下でもう少し説明してみよう。

これまで見てきたように、自己言及のパラドクスが問題になるのは、語る自己と語られる自己とが自己物語において重なってしまうことから生じるのであった。したがって、この問題を避けるために、2つの自己は同じでありながら同時に異なっている、という状態が作り出される必要がある。自己物語は物語の構造を利用してこの状態を暫定的に実現している。すなわち、語りの主人公が活動する「物語世界 (tale world)」と語り手の所属する「物語領域 (story realm)」との異なる場所に、さらに、語り手の「現在」と語られる自己の「過去」との異なる場所に別々に置くことによって、同じものであっても違うという状態を実現しているのである。このようなフィクションが成り立つために他者の関わりがどうしても必要となるのだと彼は指摘した。そして、他者の果たす役割を3点から見抜いている。一つ目として、「語る自己」と「語られる自己」との分離が他者の視点を自己のものと偽装することによって初めて可能であることを、二つ目として、「現在の自己」と「過去の自己」とが違っていながら最終的には同一であることはそれを認め証言する他者の応答によって初めて可能になることを、三つ目として、自己物語を既にそこにあるテキストとして認め、そもそもそのテキストに他者が関与していることを忘れ去ることを行っている、ということを見逃さずに掬い取っているのである。このようにして、「語りえないもの」は他者の果たす役割を利用して自己物語の中に吸収されて、他者との共同作業が続く限り暫定的に回避されるのであった。

浅野 (2001) は過酷な体験によって受けた傷としてのトラウマを検討することで、それを「語りえないもの」の一つの典型とした上で、トラウマは特殊で例外的な事態だけを指すのではないと言及し、この世に生まれてきたこと、見知らぬ他者と出会うこと、言葉を語ることという誰にとっても避けることのできないこともトラウマであると示唆している。それらはすべて生の「意味」の前提でありながら、それ自体は決して意味を付与され得ないものである、ということから、トラウマ的体験と同じ構造を持っていると指摘している。人は自己を維持する上で自己物語を語り続け、自らの生を必死に意味の網に織り込もうとするのだが、その足場になっているもの自体には意味が欠けていたりする。しかし、そのことが忘却されている限りにおいては足場として機能する。ここまで見てきた自己言及のパラドクスは、このような欠如の最も基底的な形

であり、それはトラウマ的体験なのである、と彼は最後に示唆している。

彼の示唆を精神分析的立場から明確に指摘したのが大山 (2007) である。彼は「表象不可能性」という言葉によって心理臨床の現場で起こる困難さを掬い取ろうとしている。しかしながら、彼のその精妙な試みを本論で論じることは現段階の筆者の力量を超えているので、今はただ言語獲得による表象不可能性の引き受けという事態に触れるに止めたい。

大山 (2009) は、3歳の時期に子どもが「わたし」という一人称を使用することに注目して、「わたし」とは一つの虚構、おそらくは人類が手にした最大の虚構である、と示唆している。そして、「わたし」とは「それ自体では意味規定内容をもたない空虚なものである」とし、この「空虚な一点を媒介としてこそ、私たちは記憶やイメージをつなぎあわせ、『わたし』を構成するのである」と指摘している。そして、この同じ時期が精神分析的にはエディプス期と見なされているのだが、ラカンがエディプス・コンプレックスを象徴界 (le symbolique) への参入として読み替えたことを援用して、表象不可能性を論じている。エディプス期においては、それまで母との二者関係に満ち足りていた子どもに父 (父なるもの) が介入してきて、子どもを二者関係から連れ出し、社会的な三者関係へと引き込むという、心理学的には重要な切断が行われると考えられている。ここで、父からの禁止は「父の名 Nom-du-Père」とラカンは呼んだが、「名 Nom」と「否 Non」とを音韻で掛けて、「父の否 Non-du-Père」の意味も持たせている。この父は、実在の父でありながら、同時に象徴的な父のことであり、世の中の規範や倫理性を含意している。そして、規範とは何より言語体系を意味しているのである。大山 (2009) によれば、「言語とは、果てしなく延長される想像的な欲望の世界、自己と対象が一体であるような世界を断念 (切断) させ、これまで人々が構築してきたルールを持った体系的な世界へと『わたし』を埋め込む」のである。そして、「言語によって思考し表象するようにいったんなってしまうと、それ以前の世界にはもう私たちは戻れない」のである。このようにして、「子どもが『わたし』という言語によって自分自身を表象するようになる」ということは、自分をひとつの規範性の中に位置づけることになる」のである。ここで、言語の獲得、社会性の獲得という一見ポジティブに見える発達によって、ともすると見落とされがちになる重要なことがある。それをフロイト、ひいてはフロイトを継承・発展させたラカンは見逃さなかった。それは、「言語で自己を表象するという自己言及的な構造を抱え込んだとき、人は自分自身を表象しつくすことができなくなる」ということである。これを大山 (2009) は「言語によって自己を表象する」ということは、自分の中に言語によっては

表象できないものを抱え込んでしまうことである」と述べて、このことを「無意識の領域の誕生」と指摘した。そして、ラカンを引いて「人間が『わたし』となるということは、このような到達できない不可能性というものを、自らのうちに抱え込むこととひきかえである」と述べている。このことを換言して、「言語的には表象できないエディプス期以前の世界というものを、一種の空白として抱え込むことによって、人は、『わたし』を獲得する」のだと表現している。

このように、我々は言葉を語るようになるということだけでトラウマ的体验を被っているものであり、「わたし」という自己を獲得し続けるために自己物語を語り続けなくてはならないのであるが、その物語を紡ぎ出していく足下をよくよく見れば、そこには言語によって表象できない空白・欠如が口を開いているのである。言語の意味作用を前提としている構築主義的枠組みでは、このような臨界状況でも成立しているコミュニケーションを考察することはできない。

5. 精神分析的アプローチから見た治療的コミュニケーション

そこで最後に、精神分析的アプローチ、とりわけラカン派のアプローチによるサイコセラピーにおいて、治療的コミュニケーションがいかに行われているかを見ていくことにする。ただし、筆者は普段の心理療法をラカン派に依拠しながら行っている訳ではないので、事例の提示は行わず、主に技法的な観点から、すなわちセラピストの立場からサイコセラピーにおいて交わされるコミュニケーションがどのような方向性を持っているのか、それを考察してみたい。

それでは、初めに精神分析的アプローチによるコミュニケーション・モデルを見ていくことにする。これは、ラカンが「シェーマL」と呼んだモデルを参考にしながら、檜村（2007）が社会学に援用して使用しているものである。右図で見る通り、左下に「自我」を表す点が「a」とされ、右上に「他者の自我」として「a'」と表されている。これら「a」と「a'」を結ぶ線は想像的關係とされているのだが、この関係が成立している限りは、コミュニケーションしている私「a」と他者「a'」との両者が立てている望ましいイメージが相互に受け入れられていることを意味している。このイメージはお互いが勝手に相手に押し付けているものとなっている場合もあり、コミュニケーションにおける齟齬としては表面化しないで潜在している状態を意味する。

先の「シェーマL」の右下の点は「大文字の他者A（Autre）」とされているが、これは目の前にいる他者（他者a）の背後にあり、自己と他者の間の言葉

の遣り取りを基礎づけている象徴的な審級である。この審級が想定されていることで、人は現前する他者a（autre）に向かって言葉を発する時に相手が同じ意味内容を了解していると信じていられ、また、両者が持続的に共有された文脈の中にいると信じていられる、とラカンは考えた。彼の考えでは、人は目の前の他者aに話す時、その背後の大文字の他者Aに向かって話している、ということになる。檜村（2007）が言うように、「目の前の他者が嘘を言っているわけではないという信頼、あるいは自分の言葉がまさに自分自身のものであり、自分の言葉は自分の考えであり、自分の意識、自分の存在である、という本質的な言葉への信頼は、この『大文字の他者A』によって可能になる」ので、統合失調者のように大文字の他者Aの支えがない人はコミュニケーションできない。

この「大文字の他者A」に呼応して「シェーマL」の左上の点とされているのが「無意識の主体S」である。ラカンにおいて真の主体はこの「無意識の主体S」であり、意識の中心である自我や生物の個体としての目の前の他者aのように実体化した主体ではない。ラカンの考えでは、私たちは何かを話している時、すべて意識的に統御して話してはおらず、知らぬ間に言葉を紡いでいる。そして、このことは話す主体が大文字の他者Aに従属していることを意味している。また、そもそも私たちの言葉や考えは、他者から言語や文化として与えられたことで生まれてきたものであり、これらの真の産出者は意識的な自我ではなく、私たちに先行する言語や文化を象徴する大文字の他者Aである、と言える。これらのことから、真の主体とは象徴的な大文字の他者Aに従って言葉を発する無意識の主体Sである、と見なすことができるのである。このことが理解できると、我々の言葉や意識には自分の統御が及ばない他者性が常に既に存在していることが分かるのである。精神分析的アプローチでは、自我や目の前の具体的他者に止まらない「大文字の他者A」や「無意識の主体S」のことを想定に入れて考えていかなくてはならないのである。

精神分析的アプローチとりわけラカン派のサイコセラピーでは、セラピーが開始された当初、クライアント（ラカン派では分析主体と呼ばれることが多いので本論でも以下、分析主体と表記する）はセラピスト（ラカン派では分析家と呼ばれることが多いので本論でも以下、分析家と表記する）が自分の知らない心の問題について示唆してくれるはずだという幻想を持っており、分析家に陽性の転移を起こす。この時は、先に見ておいた「シェーマL」で「a-a'」の想像的關係が駆動している。ラカン派では、精神分析を行うことで分析主体の無意識「A-S」の回路（「A」から「S」へと向かう無意識の流れ）にアプローチして、これが駆動することを目指そうとしている。ところが、分析主体

は大抵、心的外傷や強い抑圧によって無意識の回路を閉ざしている。彼らは、過去の外傷に触れずに済むように抑圧で心を防御しており、自由に言葉を紡がせる無意識の流れをシャットアウトしているのである。このように、閉じられてしまっている「A-S」の回路を、分析主体と分析家の「a-a」の回路を使って如何に駆動させていくか、ということがラカン派の治療課題となってくるのである。

それでは、このことをもう少し詳細に見ていくことにする。それを見ていくためには、ラカンの臨床を彼の活動の時期から3つに分類している赤坂(2011)を参照していきたい。彼の分類基準のうち本論に関係するものは、ラカン第一臨床と第二臨床の2つである。ラカンは彼独自の区別により、神経症・倒錯・精神病という3つに病理学的カテゴリを大別したが、本論で考察しているナラティヴによる治療的関わりがもたらす奏功するのは神経症のグループである。ファルスの構造的な違いに基づいた彼独自の分類のうち、神経症のカテゴリでの臨床実践はファルスの抑圧に取り組むものである。それはラカンの臨床活動を後継者のミレールに基づいて三期に分けたもののうち、前期及び中期に亘る。すなわち、「同一化の臨床」と「幻想の臨床」と呼ばれるものである。端的に言うと、前期においては想像的なもの(imaginaire)としての小文字の他者(autre)と主体の関係、および象徴的なものとしての大文字の他者(Autre)と主体の関係について中心化された臨床であり、中期では対象a(objet a)と主体の関係について中心的に考察している臨床である。これら2つの臨床の取り組みから如何に「A-S」の回路を駆動させていくのかということを、以下で確認していこう。

初めはラカン第一臨床(同一化の臨床)である。赤坂(2011)によれば、「主体とは大文字の他者、先行するランゲージュ、出自の世代といった基本的な所与に従属している存在」であり、この従属が症状を形成しており、その症状は大文字の他者へ書き込まれている解読可能な意味あるいは真理として想定されている。ここで、分析家が解釈するためには無意識の形成物(夢、既知、言い間違い、失錯行為、アナグラムなど)における同音異義語や家族コンプレックスを基礎にした「文字や語の転移」に注目して症例を考えてシニフィアン連鎖を追っていくことが重要である。それ故「主体が分析を通して成すこととは、大文字の他者へ書き込まれた自らの真理に出会い、それを承認すること」ということを意味しているのである。換言すれば、「主体は自らの歴史を再構成することで症状を解読し、これまで従属していた隠されていた意味への同一化から離れ、解読された新しい意味に同一化する」のである。これを分析家の視点から見れば、「分析主体のパロールに転移された文字や語は別の意味を担っている。そ

こで、分析家はこの意味を分析主体にもたらしするためにシニフィアン解釈(内容のある解釈)をし、それが適切である場合、分析主体においてシニフィアンが連鎖され、意味が産出される。こうして、分析主体はその意味を認めることができるようになる」のである。この過程で分析家は分析主体によって大文字の他者の位置に据えられる。このような同一化の臨床を通して、「真理を実現した主体は欲望する主体となり、自らを拘束していた様々な所与から離れることができる」と期待されている。

次にラカン第二臨床(幻想の臨床)である。赤坂(2011)によれば、「分析家は小文字の他者の位置だけではなく、対象aの位置に位置づけられ、分析主体にとっての欲望の対象として分析を先導する。その際には分析家は分析主体によって知を想定された主体(sujet supposé savoir)と見なされ、分析主体は幾度となく真理を練り上げる。しかしながら、そうした分析過程を経て、或るとき主体は対象aの本性的な見せかけ(semblant)であることに気づき、分析家は何かを本当に知っている大文字の他者ではなく、自分自身が何かを知っていると想定していたに過ぎないことを経験する。こうして主体は分析家という見せかけの大文字の他者を補完することなく、それへの同一化から離れていき、脱同一化を実現していく」のである。これをもう少し具体的に表現すれば、分析家は“あなたの問題の解答を知っている”と分析主体に見なされるので、分析主体は愛や攻撃性を使って分析家を揺さぶることによって解釈を求める。この状況で分析家が通常の解釈(内容のある解釈)で応えてしまうと、分析主体は解釈への同一化によって愛や攻撃性が強まったり、解釈への反発によって愛や攻撃性が互いに転化したりして、抵抗が強まる状況に陥る危険性がある。そこで、分析家は意味を持たない解釈(空白をもつ解釈)で応えることによって「私は知らない」という態度を表明して、分析主体に自ら思うところの幻想を展開させる、となる。赤坂(2011)はこれを「無意識的な陽性転移という愛や陰性転移という攻撃性の過程を含んで、幻想という意識的な陽性転移を展開することを通して、分析主体はシニフィアンを数え上げていく」と表現している。

このように、ラカン第一臨床(同一化の臨床)と第二臨床(幻想の臨床)とでは一見すると全く違った遣り取りが展開されるように思える。治療的コミュニケーションという観点からすれば、相反しているとも言えそうな内容である。しかしながら、赤坂(2011)によれば、分析過程に関して同一化の臨床をより深く考察したものが幻想の臨床であると考えられ、同一化の臨床を終えて幻想の臨床に進むのではない、と言う。精神分析の面接過程においては、分析主体がその時点での真理に触れてそれに同一化したり、分析家へ

の愛で分析が停滞したり、脱同一化して幻想を転覆したりして、分析が進展していくものである。彼によれば、『内容のある解釈』であるシニフィアン解釈はシニフィカシオン（signification：意味作用）を産出し、『空白をもつ解釈』であるスカンシオンと沈黙はシニフィカシオンの産出に加えて、脱同一化の機能を持つが、「どちらの解釈でもシニフィカシオンの産出と脱同一化は起こる」のである。それ故、二つの技法は同じ面接過程において適宜お互いを補完するようにして使用されることになる。以上、ラカン派の臨床的アプローチでは、分析家が「内容のある解釈」と「空白をもつ解釈」を併用することで「A-S」の無意識の流れを回復する、と捉えておきたい。

以上より、私たちの言葉や考えの真の産出者が私たちに先行する言語や文化を象徴する「大文字の他者」であることから、真の主体とは象徴的な大文字の他者に従って言葉を発する「無意識の主体」であることが理解された。このことから、我々の言葉や意識、ひいてはそれを基に行われるナラティヴ行為には自分の統御が及ばない他者性が常に既に存在しているのだ、ということが確認された。

6. おわりに

治療的コミュニケーションとしてのナラティヴは、言葉を習得するまでの養育者とりわけ母親との最早期の関係がその基盤（マトリクス）となっており、その内容に関しても元は他者である養育者から取り入れたものであることが確認された。そして、言語を獲得して以降、「わたし」という自我（主我に相当する自己）を形成した後、「わたし」という自己を維持するために他者に向かって、「私」という自己物語を語り続けているのである。しかしながら、この自己物語は時として自らを苦しめる桎梏にもなりかねず、「自分を変えたい」と真剣に悩むことになった場合、その時点での自己を変えるための作業を開始しなくてはならない。その時に必要となる治療的コミュニケーションは、主として心理療法の場面において見られるカウンセリング的対話となる。このカウンセリング的対話においてクライアントが生成するナラティヴは、クライアント本人の意識では捉えることの困難な無意識の主体が生成するものであって、そのような無意識の流れを通して紡ぎ出されるナラティヴがクライアントのそれまでの自我のあり方を変えていく。

本論では、以上のように治療的コミュニケーションとしてのナラティヴを捉えており、これまで「発話主体の意味行為として、行為の遂行としてのナラティヴ」（森岡、2011）の側面から論じてきた。ナラティヴを取り扱う研究者の多くは言語及びその意味作用を暗黙の前提として論じているのであるが、「自分を変え

る」必要性を訴える人に応対しなければならないという実践の場面、とりわけ、コミュニケーションを成立させている暗黙の前提を問われるような臨界的な事態においては、意識的な行為遂行に限局するだけでは不十分である、と言わざるを得ない。このような実践的場面に立たされる者としては、本論で見てきたような治療的コミュニケーションにまで考察を進めねばならないだろう。ナラティヴを研究対象として静的に探究するに止めるのではなく、本来持っているダイナミックな働きを考察していこうとすれば、無意識のシニフィアン遂行を考慮に入れなければ、その働きの全貌を捉えることはできないのである。

ただし、本論では具体的なケースを通した心理臨床学的研究からの検討は行っていないので、主として概念的な検討に止まった。今後、機会を改めてその方面からの研究を積み上げることが課題となろう。

【引用文献】

- 赤坂和哉（2011）：ラカン派精神分析の治療論、誠信書房。
 浅野智彦（2001）：自己への物語論的接近、勁草書房。
 浜田寿美男（1994）：ピアジェとワロン、ミネルヴァ書房。
 石谷真一（2007）：自己と関係性の発達臨床心理学、培風館。
 岩田純一（1998）：〈わたし〉の世界の成り立ち、金子書房。
 樫村愛子（1998）：ラカン派社会学入門、世織書房。
 樫村愛子（2007）：ネオリベリズムの精神分析、光文社。
 Mead, G. H. (1934): *Mind, Self, Society*. The University of Chicago Press. (稲葉・滝沢・中野 訳 (1973)『精神・自我・社会』青木書店.)
 森岡正芳（2008）：今なぜナラティヴ？—大きな物語・小さな物語—、森岡 編『ナラティヴと心理療法』、金剛出版。
 森岡正芳（2011）：ナラティヴアプローチから心理療法へ、日本心理臨床学会第30回大会論文集、日本心理臨床学会。
 野村雅一（1996）：身ぶりとしぐさの人類学、中央公論社。
 大山泰宏（2004）：電子メディア社会の心理療法—日常性の心理療法5、こころの科学117、120-126、日本評論社。
 大山泰宏（2007）：心理臨床における表象不可能性と主体をめぐる考察—イメージと語りの否定から—、京都大学博士取得論文。
 大山泰宏（2009）：新版 人格心理学、放送大学教育振興会。
 Stern, D. (1985): *The Interpersonal World of the Infant*. New York: Basic Books. (小此木・丸田監訳 (1989)『乳児の世界』神庭 訳、岩崎学術出版社.)
 Stern, D. (2000): *The Interpersonal World of the Infant*; first Paperback Edition. New York: Basic Books.
 内田伸子（1990）：想像力の発達、サイエンス社。